

それからの
武蔵

第一卷



© K. Koyama 1964

それからの武蔵第一巻波浪篇	著者 小山勝清 発行者 斎藤修一郎 印刷所 豊国印刷株式会社	昭和三十九年四月二十五日発行 昭和四十年七月十日第六刷	東京都文京区音羽町三ノ一九 発行所 東都書房 電話・東京(九四二)一一一一 振替口座・東京七二七三二	定価 二六〇円
---------------	--------------------------------------	--------------------------------	---	---------

(製本・藤沢製本所)

乱丁・落丁の際はおとりかえいたします。

それから
の武蔵

第一卷
波浪篇

小山
勝清

東都書房



目 次	波 浪 篇
--------	-------------

乱	夜	キ	南	刀	わ	出	転	波	立
	の	リ	な		か				つ
	し	シ	ま	と	れ				
	ぶ	タ	ん		路	発	身	紋	鳥
雲	き	ン	船	槍					
		武	せん						
		士							

一 二 三	一 〇 三	九 三	七 九	六 七	五 五	四 七	三 三	二 七	九
-------------	-------------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---

織 せき	劍 けん	転	殺	底	岩	熊	南	女	追 お
	聖 せい				戸		へ	ご	
	蔵 くら						往 ゆ	こ	
	人 ひと				観 かん				
月 げ	佐 すけ	進	陣	流	音 おん	本	く	ろ	跡 あと

二六	二七	二五	二九	一九	一七	一五	一五	一五	一三
----	----	----	----	----	----	----	----	----	----

装幀
カット

川合喜二郎
野口昂明

それからの武蔵

第一卷 波浪篇

立
つ
鳥



慶長十七年四月十三日、この日のことを当時小倉の城主であった細川家では、こう伝えている。

朝、下関からこぎ出した武蔵の小舟が、船島（今の巖流島）の沖合に現れたのは、約束の辰の上刻（午前八時）を、二時間もすぎた巳の刻（午前十時）に近いころだった。

船島は、一にぎりほどの不毛の小島、浜辺にそうた百坪あまりの青草原が、定められた今日の試合場だった。うしろには、まん幕をはりめぐらし、家老の長岡佐渡をはじめ、検分役の歴々がひかえ、まわりは、点々、足軽どもが固めている。

舟は海峡の波をきって、ぐいぐいと進む。

武蔵は、すわったまゝ、じっとまん幕のあたりを、うかゞっている。近づくにけれ、色めきたった役人たちの気配が、つよく迫ってくる。中にするどい一筋の剣気。武蔵は、小次郎の姿をさがし求めているのだ。

巖流佐々木小次郎。彼は今、小倉の城主細川忠興に抱えられ、九州の麒麟とうたわれているが、剣名

は、宮本武蔵とならんで、広く全国になりひびいている。

人々は、武蔵といえ、小次郎を思い、小次郎といえ、武蔵の名をあげる。すでに少年の頃から剣客としてきこえ、相似た剣歴をもつ宿命の競争者だった。

ともに門閥も背景もない。頼むはたゞ実力、孤剣をひっさげて名門、剣豪に試合をいどみ、これを打破っていく外に、出世の道をもたぬ浪人であった。

しかも武蔵は、京都の名門、吉岡兄弟との試合を初めとして、名ある剣客と立ちあうこと五十数回、未だかつて一度も、おくれをとったことがない。一方、小次郎も、諸国の剣豪をなぎ倒し、ついには將軍家の指南番、小野次郎右衛門をくだし、これ又一度もやぶれたことがなかった。

こうして、同じ出世の街道を奮進する、青年客気の二剣士は、半ば世論にあやつられて、いつしか私怨にも似た、はげしい敵対の感情をいだくようになったのである。

舟は、浜辺まであと二十間あまり……。

「あつ、いけねえ」

とつぜん船頭が叫んだ。ずゝ、ずゝ……舟底が洲先にのりあげたのだ。と、またこの時である。かなた、まん幕の中から、ひらりと飛び出した一人の壮漢。武蔵は、これを見てはつと息をのんだ。猩々緋、真紅の袖なし羽織に染め革のたつつけ袴、紺の足袋に草鞋、高く結びあげた漆黒の総髪、長刀を小脇に抱えた見事な若者、いきなり、こちらをめがけ颯爽とかけ出したのである。

「おう、佐々木様だ！」

船頭が、あわてて叫んだ。

「うん、小次郎だ。よめたぞ！」

武蔵は、すつくと立ち上った。白羽二重の袷に、西陣茶色の角帯、特にこよりをつないだ細ひもを、たすきにあやなしている。刀は大小ともおびず、短刀だけ前半にたばさみ、左手には、今朝下関の宿で、使いふるした嚢をもらいうけ、手ずから作りあげた、四尺二寸の木刀をひっさげている。この木刀は、今に、肥後熊本^{ひご}の金峰山麓、松尾村の雲巖寺に保存されているが、到底常人がふりまわせるような、なまやさしい代物ではない。

「船頭、手間はとらぬ。へさきを変えておけよ」

武蔵は、袷のすそをからげ、ざぶりと水中におり立った。

二一

水は、脛を没するほどの深さだった。

武蔵は、ざぶざぶと、潮を押しわけながら、帯にはさんだ手拭をとって、一重に鉢巻をしめた。と、細川藩士の記録「二天記」に書いてある。

この事は、さすがの武蔵も、いさゝかあわてていたことを物語っている。武蔵は、小次郎がまん幕からとび出し、駆けよってくるのを見て、

「さては小次郎、水ぎわに出て、迎えうつつもりだな」

と、見やぶったのである。そうなると、地の利は絶対に小次郎にある。そこで、そうはさせじと、自分も、いそいで水中にとびおりたのだ。しかし、やや進んだころ、武蔵は、

「あぶないっ！」

と心中で叫んで足をゆるめた。小利をあらそって、心の平静を失うことの愚に、卒然と思ひ至った

のである。もしかしたら、わざと駆け出して、相手の虚をつく、小次郎の術策かも知れないのだ。

今、太陽は雲にかくれているが、武蔵は、その太陽をうしろにしている。

「馬鹿っ、何をかあわてる」

武蔵は、五尺九寸の長身に、日輪をおい、一步一步をふみしめてゆっくり歩みを進めた。あと二十歩、すでにして、小次郎は水際に立ちほだかり、物干竿と言う三尺二寸の長光をひきつけ、

「武蔵見参！」

と、声高に呼ばわった。

水はもう、くるぶしをひたすぐらい。

「おう、小次郎よなあ」

武蔵も、きつと答えて突つ立った、

四つの目が、火花をちらしてぶつつかった。しかし、意外にも、憎しみの色はなかった。思えば不思議、たがいに闘魂をもやして、相求めること数年、遭うは今日が初めてなのだ。これが武蔵か！ 小次郎か！ と、二人は、讃嘆しあうように、顔を見合わせた。

武蔵は二十八、小次郎は二十六歳、背丈はほとん

どかわらない。武蔵の顔は、冷たく蠟のように白く、小次郎の顔は、はなやかに桜色だ。

もし、この二人が、別な条件、環境の下で会っていたなら、戦うまでもなく、たがいに剣技を認めあって、友人になったかも知れない。いや、今日の日が半年のびていたら、ついに戦う日は来なかっただろう。すでに小次郎は細川家に仕え、武蔵もまた、近く某家に抱えられる話もちあがっていたのである。互に主をもつ身分となれば、こうもたやすく、命をかけた試合はゆるされないのである。

だが、今は是非ない。一しゅんの後二人の眼は、憎悪と反感に、かっとなえあがった。つもりつもった闘志の激突だ。もはや技をくらべるというのではない。相手の血をもとめ、魂までも斬り伏せんとする必殺の眼である。たゞ、小次郎は、もち前の覇気にまかせて、火のように燃え、武蔵は、内に秘めて、氷のように冷やかだ。

「武蔵！」

「……………」

「む……武蔵！」

小次郎は、あふるる侮蔑の念をこめ高飛車に吐き

すてた。

三

「武蔵！　なんで約束の時刻をたがえた。それが兵法者の作法か！　恥を知れ、恥を……」

絶対有利な地歩を占めた小次郎は、勢にまかせて、毒舌をたゞきつけた。

小次郎は、剣をとつての豪の者であるばかりでなく、弁舌の雄でもあった。彼が、とうとうと、まくしたてる雄弁は、聞く者を圧倒し、翻弄し、信頼と尊敬を勝ち得るに充分だったし、毒舌は、時に相手の肺腑をつらぬき、戦わずして敵を懾伏させる魔力をもっていた。

「はっ、はっ、はっ、はっ……いや、これは、きさまの奥の手だったんだな。あ！　知ってるぞ武蔵！　一乗寺下り松の時といい、三十三間堂の折といい、あわれ名門、吉岡一家は、きさまのこの手にかゝって潰え去ったのだ。だが、笑わせるぞ武蔵！　その手をわれに用いんとは——かゝる兇戯に類した術策に、うかうかと乗る巖流だと思ふか！」

小次郎は、せゝら笑ったが、ふと、ぎくりとして、ひっさげていた長刀の柄に手をかけた。折から雲間をはなれた太陽がきらりと彼の目を射た。そして、立ちほだかった武蔵の姿が、倍ほども大きく見え、今にも、のしかゝってくるように感じたからである。

小次郎は反射的に、

「来るか！」

と叫んだ。武蔵は無言、静かに體の木刀を正眼にとつた。

「来い！」

小次郎は、いきなり長刀を抜きはなつと勢いあまつて、左手に残った鞘を思わず投げすてた。鞘は、海中にとび、ざあと波に洗われた。

と、見るや武蔵は、にっとほおえんだ。すばらしい反撃の言葉が見つかったのである。武蔵は、小次郎の悪口雑言を、だまって聞き流したが、けつして愉快ではなかった。

「小次郎！」

「な、なんだ？」

「試合は、お前の負けだ！」

「な、なにを……」

「勝つ試合なら、なんで韃をすてた。もはや運命きわまったぞ！」

「こ、こいつ、何のたわごと……」

小次郎は、思わぬ反撃に青ざめ、ぶるっと怒りにふるえた。彼はもう水際に立って迎えうつという初めの計画もうち忘れ、ざぶと水中に片足をふみこんだ。

武蔵は、その出ばなをおさえて、木刀を突きつけ、ずうっと進み出た。

物すごい気魄、小次郎はおされ、だじだじと後にひいた。三步、四歩、五歩……とたん、武蔵の長身が水をけって舞い上った。

「おう！」

小次郎は、腰をひねって拌みうち、宙に浮いた武蔵のみけんに斬りつけた。武蔵の木刀も小次郎の脳天に落ちかゝった。

が……にぶい音がした。武蔵がしめた鉢巻が、ハラリと地に落ちた。

小次郎は、二、三步よろめくと、あおむけに、ばったり倒れた。

四

それは、実に一しゅんの激突！ 小次郎が憤怒のあまり不用意にふみ出した、その虚に乗じた武蔵の電撃が、ついに勝敗を決したのである。

武蔵は、これまでも大事な試合は、常に一撃をもつて、相手を倒した。今度も武蔵は、その一撃をねらったのである。

しかし、その勝敗は、紙一重のちがいだった。さすがは小次郎、斬りおろした長刀のきつ先は、武蔵がしめた鉢巻のむすび目を、水もとまらず切って落したのである。

だが、そこに、武蔵が、わざわざ鱧をけずって四尺二寸の木刀を作った、用意のほどがかゝわれる。三尺二寸の長光と、四尺二寸の木刀の長短が、勝敗を決したともいわれよう。

かくて、ついに試合は終った。小次郎は倒れた！ と、誰の目にもそう見えた。長岡佐渡をはじめ、検分の役人たちは、あっと声をあげてかけようとした。しかし途中で、佐渡が、

「待つ」

と、叫んでおしとどめた。

何たることぞ、武蔵は、決戦の構えを、いささかもくずさず、倒れた小次郎に木刀を突きつけ、じりじりと迫っていくではないか。

「さては、小次郎、たゞころんただけだったのか？」

役人たちは、息をのんだ。

しかしよく見ると、やっぱり小次郎の頭はうちくだかれ、血汐は赤く額をそめてる。たゞ、まったく息絶えておらぬ証拠に、かっと目は見開き、胸のあたりが大きく波うっている。しかし勝敗はもう明らかである。

「この上、一撃を加えずとも……」

佐渡は、こう考えた。

「勝負見えた、武蔵やめい！」

佐渡は、あわや声をかけようとした。が、一しゅん早く、がばと半身をおこした小次郎の長光が、さつと横にひらめいた。武蔵は足をかざめてとびあがりざまに、びゅうっと木刀をふりおろした。小次郎の長刀は、たれさがった武蔵のすそを、三寸ほども切りさいただけだったが、武蔵の木刀は、無残！

小次郎の胸部を、ごぼとうちくだいた。

小次郎は、鼻口からどくどくと血をふきだし、どたりと又、あおむけに倒れた。目はまだ怨みに燃えて大きく見開いている。しかし、もう、みじろぎもせず、死相は急速に、小次郎の顔をおおうた。それでも武蔵は、なおも、しばらくはじつと木刀を突きつけていたが、やがて、つと身をかざめて、手のひらを、鼻口にあて、顔を近づけて呼吸をうかづった。むろん全く息たえている。

武蔵は、すつくと立ち上った。そして、全身の血が氷りついたかのように、色青ざめて立ちつくしている役人たちに軽く一礼すると、くるりとさびすを返して、元きた海中に足をふみこんだ。佐渡も、ぼう然と見おくった。

わずかの間であったが、潮流は向きを変え、下関へ向かって、うずをまいて流れている。船のへさきも、沖へ向けなおしてある。武蔵は、ひらりと跳びのった。船頭が、歯の根もあわずがたがたふるえている。

「だ、旦那、お、おめでとうございます」
「うむ、いそげ」